

大学探検部四年間の後

(それから考えたことあれこれ)

探検委員長 大嶋 通弘

「摩訶不思議なクラブがあるという巷のうわさに、どんな拍子か知らないがつつい探検部の戸をたたいてしまった。」何かのきっかけとはずみで諸君は今関西大学探検部に居る。それは、例えば探検というものに神秘的なものを感じたのか、行動的なものを感じたのか、はたまた強力な勧誘によるものかは様々であろう。しかし、そこにこれまで探検という言葉が創り上げてきた魅力を感じとったという点では皆、共通しているのではないだろうか。

一般に探検には「パイオニアスピリッツ」という大黒柱が存在する。各大学に探検部が創られた時代から、すでにその目標とする方向は異なっていた。一方は学術的分野に向って、一方は体力や行動力を活用した地域的分野に向ってである。そして今、探検という文字はあらゆる分野の中で使われ、その意味もどんどん広がっている。もはや探検という項目で分類せよといわれた時、どこからどこまでをそこにに入れてよいのか判断に迷ってしまう。あえてその基準を作るとするならば、それぞれの行動や分野の中にパイオニアスピリッツが生きているかどうかということではないだろうか。このようないろいろな分野で活動する人々が、同じ精神の働きかけによって、それぞれの目標を探究し、独立した世界を確立していく。最も小さな未知の世界である細胞に興味を持った者は、細胞学や遺伝子工学を、民族やその生活に興味を持

った者は登山やアクアラング、そして宇宙を…。

それでは、はたして自分自身は、目標を探究していこうと努力してきたであろうか。探検部という野暮な組織に守られていることで、かえって本当に自分たちが何に興味をもって、何を探り出したいのかを忘れてはいなかっただろうか。また、今自分の行っている活動こそが探検であるというごまかしによって、視野が狭くなり、大切な外の世界の出来事を検討もせず否定しなかっただろうか。

現実を振り返って見ると、理想とはうらはらな、矛盾した出来事が山ほどあった。よく行き詰った時など、むやみやたらに山へ行って、「ヘタに考えるより、体を動かすことだ。」などと思ってもいた。そんな中でも探検部として、比較的攻撃的な考え方をもった者たちの集まったクラブとして、こうなるとはいけないと考えていたアンダーラインだけは持っていた。それをこえてしまったとき、それはパイオニアスピリッツの欠落した探検部である。余った時間をつぶすための、消極的な活動。今できることしかしないような、前進のない、まして発見や驚きを伴わない活動。クラブという名のもとに集まったがために、その集団を維持するためにだけあるような組織。このような状態は、探検部の活動が、何らかの形で第三者と常に触れ合ううえで、迷惑をかける以外の何ものにもならない。そんな集団にだけはなりたくない…と。

さて、関西大学探検部も創部二十五周年をすぎ、その中で諸先輩方の手で多くの活動が行なわれてきた。あるものは世代をこえて受継がれ、またあるものは消滅した。また一方では新たな発見に興味を示し、仲間を募った計画もある。その経過を振り返るならば、新たな行動を起こしたものにとって、四年間というものは短かすぎるに違いない。彼らには少なくとも計画に仲間が集まり、後継者ができた時から、その行く末を（独立するか消滅するまで）見極める責任があるのではないだろうか。

創部後二十五年を経て、現在の探検部にはいくつかの異なった活動をしている集団がある。私はいつか、これらの活動が、一つの目標（地域）でそれぞれの持つ技術や知識をフルに活用し、目標

を隅々まで調べつくせたら…と思っている。一つの目標に同じ精神をもった者たちが集まり、そして興奮し、あらゆることに驚き、それが報告できたならば「探検部」という独立した集団の立派な存在理由となるのではないだろうか。

自分のできなかったことを子供に託するのが一般の親であるらしい。そうならないことを心掛けてきたつもりだが、なかなか難しい。サラリーマンというものに対して最も身近かで、最も難しいバイオニアワークは、今ある生活からの脱却であると誰かが書いていた。新たに生まれてくる消化不良で欲求不満のOBたち、やがて熟すであろう機会をのがさぬように常につめをといて待っていようではないか、四年間では短かすぎる。

(18代OB)

